京交山岳部報

No. 393　　'85　7月号

〔第１５４３回例会〕

高　賀　山　(R)

日　　時　7月6日(土)～7日(日)　壬生交通局前　１５時出発

コ　ー　ス　京都ー大垣ー岐阜ー洞戸村ー高賀神社…高賀山

担 当 者　本局　大槻雅弘(TEL 722)

備　　考　マイカーで行きます。テント泊りの予定です。食事の用意は各自でお願いします。

〔第１５４４回例会〕　加越国境

大長山と赤兎山　(T)

日　　時　7月13日(土)～14日(日)　午後出発予定

コ　ー　ス　京都ー福井北ー勝山ー河合ー小原…小原峠…赤兎山…大長山

担 当 者　高速　大槻貞従(TEL 451−1565)

備　　考　春山スキーで行った取立山の続きの国境尾根です。白山をながめる稜線コースを楽しく歩きましょう。

〔第１５４５回例会〕　府県境の山シリーズ(60−4)

鉄鈷山△718.2m　(R)

日　　時　7月21日(日)　壬生交通局前　7時出発

コ　ー　ス　京都ー福知山ー和田山ー宮田ー竹ノ内ー林道終点…鉄鈷山

担 当 者　高速　岡田茂久、　OB　津田　実(TEL 255−4305)

〔第１５４６回例会〕　夏山トレーニング

金　毘　羅　山　(T)

日　　時　7月28日(日)　北大路駅　8時集合

担 当 者　梅津　吉田　武(TEL 788)

備　　考　各自　10㎏の荷物持参のうえ参加のこと。

〔第１５４７回例会〕

愛宕山　千日詣り　(R)

日　　時　7月31日(水)　四条大宮駅　１５時集合

担 当 者　OB　津田　実(TEL 798)

今月の集会

7月10日（水）　下鴨寮

企画運営リーダー会

7月18日（木）　田中宅

国際森林年によせて

岡田茂久

カレンダーをめくってみると年間にはずいぶん多くの……記念行事が定められている。6月・7月だけをあげてみても、6月の1日気象記念日、電波の日、写真の日、4日からは歯の衛生週間、5日は世界環境デーで環境週間が始まり、7日は計量記念日、10日は時の記念日、16日は父の日、18日に海外移住の日、23日沖縄慰霊の日、25日救癩の日、28日は貿易記念日、7月に入ると1日国民安全の日、10日からは国土建設週間、20日勤労青少年の日、海の記念日と続き毎月1日は省エネルギーの日と定められている。

これらの行事は政府各省庁や民間団体、それに売らんかなの業界団体がそれぞれ理由づけし日や週間などを定めたもので、なかには10月10日、目の愛護デーのように眉毛と目の姿より定めたというのもあり、お互いに何等統一性も関連性もない。したがって特定の日に記念日が集中したりしている。そう必要性もないだろうがひとつ厚生、文部、通産省あたりが音頭をとり365日毎日何等かの記念日になるように調整すればすっきりするのではないかとも思ったりする。

ともあれこれだけ多くの行事が年間を通じて定められていると、はたしてどれだけの人々に記念日や記念週間の意義や趣旨が周知徹底されているか疑問であり、おそらく大多数の人々にとってはへーッこんな記念日があんの！というのが実情ではないであろうか。マスコミもくだらないニュースを追うばかりでなく、より多くの人々が記念日の意義を理解し関心をもつよう積極的に啓蒙してもらいたいものである。

ところでこれらの多くの行事の中、今年は「国際森林年」と定められている。これは昨年の11月に国連の食糧農業機関で決められたものであり、全地球的な規模の運動で緑を護ろうというものである。今年1月の首相の施政方針演説でも〝地球環境の保全は、人類生存の基礎となるものであり、わが国は、これに積極的に貢献していきたいと考えます。本年は「国際森林年」の年でもあり地球森林資源の保全、函養に、積極的に取り組んでまいりたいと考えます。〟とわずか百十字であるが触れている。どのような積極的な施策が我国でとられているのかしらないが、現在日本の森林は人工林が一千万ha、森林が二千五百万haであり、国土面積との比率では60％をしのぎ、それ

はカナダ、米国以上の森林国である。しかし世界をみるとき、発展途上国を中心として枯渇や乱開発が進み、現在年間で我国の人工林に匹敵する一千万haの、熱帯林にかぎっていえば1分間に10haの緑が確実に消失しているといわれている。

なにが原因であろうか。ヨーロッパでの工業国においては、大気汚染を源として酸性雨による森林の枯渇が進み全滅の危険性も指摘されている。熱帯の発展途上国では、人口の爆発的な増加に対応する食糧を得るため森林を焼き農地をもとめる。しかし前時代の小規模の焼畑農業と異なり現代では機械力をつかい比べものにならない大農地をつくり、そして数年でそれを放棄し、それにも増した森林を次々と焼いていく。そしてもうひとつの森林消滅の原因は我国をはじめとする先進諸国の木材需要で、生活水準の向上を望む開発途上国の要求と合致しますます緑の消滅に拍車をかけている。幸い我国ではヨーロッパにおけるような酸性雨の被害はめだってはいない。しかし彼地をしのぐ工業国になったいま、同じ歴史の年代を経たときに森林が枯れ始める日がこないとはいえない。又、木材の需要を外材に頼り「はい！我が国は緑なりき」といってはいられないことはいうまでもない。

世間では緑に親しむことの一番多い我々山屋が率先してこの「国際森林年」の意義を理解し関心を持つのが一つの努めではないであろうか。

第1535回例会

芦生蕗採り騒動記

津田　実

「オーイ　オバハン、今廣演習林へ山菜採りに行かへんかー」　オバハン曰く、「お父ちゃん、何が採れますねー」「そらお前、フキやらワラビやら、ゼンマイやらやー」「フーン、そやったら行くわ、演習林て何処えー」「周山のずーと奥や」「ギョーサン採れるかー」「そら熊の出る程山奥やサカイ、あんまり採れてコケテ起きられへんくらいや」「絶対行くサカイ、鷲見さんに頼のんどいてやー、そやけど、お父ちゃん、演習林てなんやー　兵隊さんの行くとこかいなー」「アホーそら…」絶句、残念乍ら不勉強で答えられない。慌てて本箱の隅で惰眠を貪っている広辞苑を引きずり出して見ると、埃りと共に出た。

「演習林　学生、生徒の林学の実地研究に役立てる森林」とあった。小生の記憶によると、由良川の源流で芦生から三国峠迄位と思っていましたが、もう20数年前、若狭を目指し広河原迄京都バスを利用、佐々里峠から灰野→七瀬→三国峠をと向い、途中で演習林の職員の方に叱られてバック、佐々里峠の地蔵さん前でビバーク、又、京都バスで帰ったことを思い出す。何故、叱られたのかは今だに不詳。それから今日が初めての紀行となる。

京都の秘境・芦生P24～25に次のように書かれている。

芦生演習林は由良川最上流にあって、ほゞ長方形、4,200ヘクタールの面積を持っている。北は

権蔵峠（636m） 杉尾峠（756m） 三国峠（776m）で福井県に接し、長治谷から奥の上谷は芦生原生林で最も歩きやすいゆるやかな地帯であるが、この尾根を境に福井県側に急におちこんでいる。

東は三国峠、三国岳（959m）、天狗峠（921m）などで滋賀県。京都市左京区に、西は権蔵峠から田歌山（792m）の尾根、南は小野割村岳（932m）から佐々里峠（833m）で、それぞれ京都市左京区に接し、四方を700～900mの尾根でかこまれ、水は西南の隅から流れ出ているだけである。その中をほゞ北から南へ杉尾峠、ケヤキ峠（780m）、ブナノ木峠（939m）の尾根と、東から西へケヤキ峠、傘（カラカサ）峠（937m）、八宙山（874m）の尾根がクロスして走り、演習林の地形をより複雑にしている。とあります。又、P71 山菜のいろいろの項には、フキノトウ、ワラビ、フキ、ゼンマイ、ワサビ、ウド、タラノメ、セリ、等々書いていたらページが増え過ぎて編集長に叱かられ、アエナク没となる恐れがある程かかれている。部員諸候も一度は手にして見るにあたいする良書である。只、古いので書店にあるかどうか？判からないが。

閑　話　休　題

だいたいのことが判ったところで、いざ出発。AM8：30分、総勢18名、車4台、無線機2台周山街道まっしぐら、目指すは秘境・芦生へ!!

山の家に到着。宿泊依頼のうえ、駐車場で服装をととのえて出発。演習林事務所のクラシックな建物と大学関係職員宿舎の間を抜けると左側に森林軌道の車庫があった。どんなものか、木曽の森林軌道と同じ位のものか見たかったが、無念にも扉が閉っていて見ることが出来なかった。然し、レールの幅、太さ、重量等の目測から察すると木曽谷で活躍していた機関車よりは少し小型の物と思われる。

由良川の本流を右岸から左岸に渡り、（此れは軌道の人と併用橋である）上流へと進む流れと、少し離れた小広いところに農家が一軒あった。よく手入れの行きとどいた畑でそこに住む人の人柄がしのばれる。此の付近に人家は無いと思っていたが、其処から先は灰野である。昭和16年12月発行の住友山岳会が出された近畿の山と谷のP378に、「灰野は古びた茅屋がら、6戸所在する詫びしい村落で」と記されている。ところが、昭和45年10月発行の京都の秘境・芦生のp26に芦生からゆっくり30分ほど歩くと、たくさんの柿や梅の木が葺ぶきの廃屋をとりかこんでいると書かれている。小生、手持ちの金久さんの書かれた京都北山2（山と高原地図00056）の由良川源流、本流溯行P22に、かって由良川最上流の部落であった廃村灰野の崩壊しつつある廃屋を横に見ながら、と載っているところから見ると、金久さんが踏査されたころ以前に捨てられたらしい。今、その跡らしきところは杉が植林されてかすかに神社跡と見られるところは、草、茫々。朽ち果てた家跡と推察出来るのみ、小生も、白山や美濃で廃屋を数軒見たが、此れ程むなしく無残なものはなかった。かって此所に住んだ人々の哀歓も、国の非情に抗すすべもなく追われて行ったのだろうか、鬼哭啾々、慄然肌に粟を生じる思いがした。

灰野から少しづつ野草を摘み乍ら奥へ奥へと進んで行く。右手に谷があったので其処へ入って行ったが余りとれなかったので引き返し本道へ出たところ、フキを沢山持って帰える人に逢い、原田

さんが親しそうに話して、何処でとれたと場所を教えて貰っていた。そこへ鷲見さんが来て、「それは土瀬だ、そこへ行こう」と云われ、更に奥へ行くと、左側に今は使われていない作業小屋があり学生らしき人達が休んでいた。その小屋の横手を下ると本流に出た。その付近で小生は下流を探しに行った。フキはあったが細くまだ早いと思い上流にもどると、皆んな、わいわい云い乍ら摘んでいた。余り御機嫌好くやっていると日が暮れるし鷲見さんが帰ろうと云ったが、女子軍は仲々帰ろうとしない。それでもなんとか説得して帰路に付く。その時分から天候が怪しくなって来たので急ぐ。山の家は昭和44年に建てられた、しょう洒な建物だ。今日は5月5日、子供の日の関係か、子供連れの人が多い。夕食後、ビールと鷲見御夫妻手作りのコゴメなる珍品を囲んで、いや誰が一番よけいとった、とか、その取りかたがおかしかったと夜の更けるのも忘れて、何処かの山中で行われた恐ろしい総括と違って、我々のソーカツは限りなく面白く、愉快だ。

翌日は夜来の雨が残って余り好い天気とは云えなかったが、佐々里峠の下で、又、野草を探し、天ケ岳付近へ石楠花が咲いていないか、全員で見に行ったが、残念。開花には少し早く、雨に追われてとんで帰った。

〔参加者〕　鷲見夫妻、井戸夫妻、F2、吉田夫妻、F3、竹田夫妻、大木、原田、三橋夫人
津田夫妻　　計　18名

第1536回例会

物見石山

奥村弘信

今年の年号1985年に因んで、1985mの山に登ろうと云うわけで、美ガ原の端にあるこの山に登ってきた。登ったと云っても、美ガ原ドライブウエイのホン近くにある山なので、ちょっと立ち寄って来たと言う程度である。だからこれだけではもの足りないので、霧ガ峰の車山と美ガ原を縦走し、帰りに武石峰にもチョコチョコと寄って来たと言うようなわけの山行きであった。

5月12日　午后0時8分に烏丸車庫を出発し、名神から中央道と走り継いで諏訪ICに16時に着いた。連休後の日曜日で案外車も少く、楽な高速道路だった。伊那を走る時、右手に南アルプスの連峰、左手に中央アルプスの山々が望まれ、いままでここを走る時は夜が明んどで、昼日なか走ることはなく、始めて目にする左右の山々を完全に目にしたのは珍らしくて楽しかった。

諏訪からビーナスライン蓼科線に入る。ここでも八ツ岳連峰が正面に全容を見せており、全くよい眺めだった。大門街道から白樺湖に出て、再びビーナスラインに入って車山コロボックヒュッテ前に16時45分に着いた。

すぐに車山を目指す。大分日が傾いて少々寒い。車山へは柵に導かれた散歩道がある。草地は雪が消えて間もないのでまだ緑は見えない。すぐに山頂台地に着く。中央に八角形の売店と屋上展望所がある。売店は閉っていて、あたりは人影がない静かな山頂であった。台地は石がるいるいとし

ていて、あちこちにケルンが積んである。三角点1926mを何度探がしても見つける事が出来なかった。石の中で石を見つけるのだからしんどい話だった。とうとう探すのをあきらめて腰を落ち着け、お飲み物を取り出した。しかし、ここからの展望は素晴らしい。霧ガ峰の全ぼうは一望であり八ツ岳連峰も目前に長く横たわっている。殊に、蓼科山が間近く大きく聳え、麓の蓼科牧場の緑の深い斜面がゆったりと拡がっている。白樺湖をとりまく色とりどりの屋根が、いかにもリゾート地らしい景色を見せていた。

再び、ビーナスラインを走り美ガ原線に入る。扉峠から左折して今夜の宿泊所、扉温泉の明神館に着いたのは18時50分であった。旅館では季節はずれの松茸の土ビンむしや馬サシの珍味にアルプスワインとなかなかの豪華版であった。

翌13日、旅館を8時25分に出発する。曇り空だが雨の心配はない。入山辺の町へ下り、高原口より駒越林道に入って九十九折の地道を走り登って、美ガ原高原天狗の露路に9時18分に着く。すぐに急坂の岩石の重さなるところをかけ登って、電波塔の林立する王ガ頭に着く。山荘の裏手、電波塔の柵の傍にある三等三角点2,034mに立つ。王ガ鼻はこの先、一段低い台地である。ここからは北アルプスが全部見渡せる。左から乗鞍岳に始まって穂高連峰から槍ガ岳、右に移って白馬岳まで余すところがない。山頂脇の山小屋高原荘に戻ると、ここから美ガ原が眼前に長く延びて拡がり、目的の物見石山も一番先に見えている。美しの塔は手前の何ものもない草原の真只中に小さくポツンと立っている。当初は、ここから引返して車で大きくひと廻りして白樺平から物見石山へ登る予定だったが、このまゝ美ガ原を突き切って行こうと決まり、縦走することとなった。

高原荘を10時5分に出発する。美ガ原台地は一帯が放牧場のため、道の両側は柵で囲まれており、これに沿って歩く。なだらかな坂道はやがて平坦な道となって担々と歩く。塩クレ場を経て、美しの塔を通り過ぎる。草原は枯れたままで青草はまだ見当らないので牛も放牧されていない。21分で山本小屋を通り過ぎる。定期バスがここまで来ている。ここからアスファルト道となり、ゲートを抜けて稜線の草原を歩く。こつ然と高原美術館の賑やかな建物や野外彫刻が目に入る。白樺平料金所の上にある武石村の導標の所より山の登りになるが、すぐに下って再び登りつめるとここが物見石山である。二等三角点1985mは岩の重なった上に据っていた。時刻は11時2分であった。汗を流す事なくホイホイと来たので、やっとたどり着いた三角点と違うため、何んだか三角点に立っても違和感はぬぐえなかったが、それでも目的の三角点であり、万才だけは大きく叫んだ。缶ビールを抜いて乾杯、記念写真をとる。ここからの眺望も素晴らしい文句のないものだった。とにかく美ガ原をとり巻く北、中央、南アルプスの山々と八ツ岳、浅間山など360度の大パノラマを存分に眺めまわして、心ゆくまで見とれていた。

帰りは牛伏山に廻ってから山本小屋に下る。牛伏山は山頂台地に所せましとケルンが積んであった。再び担々とした巾広い砂利道を歩く。美しの塔附近は遠足の小学生で行きの寂しいたたづまいと違い、賑やかで騒がしくなっていた。

王ガ頭の高原荘に帰り着いて、ここで昼食をとり、駐車地へ13時19分に戻った。武石峰はここからすぐ目の前である。走る事4分で武石峰登山口に着く。笹の中の柵に導かれて一気に登りつ

める。7分で武石峰一等三角点1,972.6mである。この山も草原の山でここからも眺めはよいがもうさんざん見てしまっている後なのですぐに下山する。これで今回の山は終りである。

帰りは有料林道美ガ原線を下る。落葉松の美しい樹林を見ながら曲折の多い道を松本まで走る。塩尻峠を越えて下諏訪温泉の街の温泉にひたる。入浴料100円は安い。サッパリして16時25分出発、諏訪ICより高速に入って一路帰京についた。

今回の山行きはドライブが主で、車山、物見石山、武石峰と、道路からすぐの所にあり、山登りとしては物たりなかったが、その代り天候に恵まれ、13日は曇りであったが雲に遮えぎられる事もなく、道中と云い、霧ガ峰、美ガ原をとり巻く各連峰を眺め渡す事が出来て、充分に満足出来たと思っている。そのうえ、秘湯の扉温泉に泊り、また帰りにも諏訪温泉にひたり有難い事だった。年号に因んだ山が良い環境の所にあったもんだとつくづく思っている。

〔参加者〕　吉田、津田、大倉、坂田、奥村

〔コースタイム〕

5月12日　烏丸車庫12:08－京都東IC 12:40－諏訪IC 16:00－車山駐車場 16:45～16:55…車山△1926m 17:10～17:40…車山駐車場 18:00－扉温泉明神館 18:50

5月13日　扉温泉明神館 8:25－美ガ原天狗の露地 9:20…王ガ頭Ⅲ△2034m 9:37～10:05…山本小屋 10:36…登山口 10:55…物見石山Ⅱ△1985m 11:02～11:22…牛伏山 11:45…美しの塔 12:10…王ガ頭 12:34～13:08…天狗の露地 13:21－武石峰登山口 13:25…武石峰Ⅰ△1972.6m 13:32～13:39…登山口 13:45－下諏訪温泉 15:40～16:25－諏訪IC 16:40－京都東IC 20:30

第1537回例会

籾糠山（もみぬか）～猿ガ馬場山

△1,744m　　1,875m　　大槻貞從

5／18（土）晴　午后1時半壬生出発、庄川村萩町天生（あもう）峠午后7時着。所要時間、5時間半。峠入口はまだ土木事務所の標識によって閉鎖されていたが、そこはよくしたもので、地元が造ったのだろう遮断機横の崖が盛土してあり乗用車一台がギリギリすり抜けられた。遮断機に先発隊のメモが張ってあったので、我々も「何時通過」と書き足して先へ進んだ。これで猿ガ馬場山登行の目度が立った。峠には立派な小屋があり、そこで寝ることにした。伊藤氏一行が遅いので心配したが12時に到着され、安心した次第である。峠には水場も造られており、キャンプ場になっている。水芭蕉の群落を見に来る人が多く、籾糠山まではハイキングコースになっているようだ。今回の山行は、めったにそろわない異色の顔ぶれで、私のような若輩には光栄である。

5／19（日）晴　この山は先年武田氏が計画されたが、未開通のため中止になった念願の山であった。今回は伊藤氏の発案で決行されることになった。奥美濃の中でもむづかしい山に属す

るとの岡田部長の言葉である。

午前5時起床、思い思いに朝食をすませ林道を１０分ほど行くと、よく踏まれた山道に出合う。道にまで水芭蕉が張り出して来ており、その豊富さがうかがえる。広い水芭蕉の湿地帯に出たところを左岸に沿って進むと道が二つに分れており、よく踏まれた左側へ折れる。そこも、又、水芭蕉の群落地で黄色い金レイカ混じりの広々した湿地帯である。道はそこから赤ペンキの標識に誘導され、渓流に沿ってなだらかな丘陵も進めば３０分ほどで、やゝ急傾斜の枝尾根を登り、更に３０分ほどでなだらかな丘に出る。ここまで来ると日影には雪が残っており、目の前に剱を立てた姿の山が現れた。ピョコンととがった形が、かっこいい。あとワンピッチで頂上に到着。１０人ぐらいすわれる頂上から、目指す猿ガ馬場山は手が届きそうな近くに横に長いどっしりした山容が残雪にかがやいている。ここはまだ早春のいぶきが残っており、こぶしが咲き新緑の広葉樹林が横山大観の絵を見るようにすがすがしい。小憩の後出発。近くに見えてはいるが稜線は左へかなりまわり込む形でつながっており、鞍部へ落ち込んでいる。もう道はなく藪こぎの始まりである。鞍部まで約20分。もう一つコブを越えた。藪と根曲竹の猛攻になやまされたが、所どころ残っている雪渓を見つけては楽に進むことも出来た。ひんやりした風が頬をなでていく。雪渓は歩きやすく能率があがり頂上へ到達出来る希望が沸いてくる。ついに稜線に出たが、もう一つ北側にピークが見える。がっかりしたが幸い頂上部は広い横一線の雪に埋っており、１０分ほどで、１８７５ｍに到達出来た。そこは、大シラビソがまばらに上半身をのぞかせており、その樹林越しに神々しい白山がピカリ光っていた。まだ真白い姿は、日本三名山の一つ、昔から信仰を集めた『越のお山』の名の通りである。帰りも雪渓を選んで下った。振り返って見るにもう一月遅く来ていたら雪渓も消えていて、藪と根曲竹の猛攻で頂上までは到達出来なかったかも知れないと思う。又この山の続きに一夜にして帰雲城を消し去った崩壊の跡がなまなましくのぞまれる帰雲山（１，６２７ｍ）がある。崩壊以前はどの山よりも高く南風にのって流れくる雲も山越えすることが出来ず、逆流して帰ったと伝えられる。戦国時代のはじめ（１４６０年代）信州より内ケ嶋氏が白川郷に入り、１，０００戸の城下町を擁して栄えたと言われる幻の城があった所である。下りは案外楽に車止まで到着出来たが、往復１１時間要した値打ちのある山行でした。

〔参加者〕　伊藤潤治、坂井久光、岡田茂久、上島和彦、田中忠久、三橋　勉、大槻貞従
ゲスト参加　宮崎日出一

〔コースタイム〕　京都東　13:36 ― 19:30 天生峠泊　（約6時間）
4:50 天生峠出発…尾根取付 5:47 …谷コース組と合流 6:39 …剱糠山 7:05 ～ 7:25 … 10:15 ～ 11:00 猿ガ馬場山… 13:30 ～ 13:40 剱糠山… 15:15 天生峠… 15:45 峠 ―八幡 18:00 ―京都 22:15

追伸　猿ケ馬場山の三角点△１８２７．４ｍは頂上から約５０ｍ（高度差）の下った地点にあるが、雪のため三角点はわからないし、時間もないので省略した。

第１５３８回例会

府県境の山シリーズ　２

高竜寺山（697m）

出海洋三

今朝の空模様は行くに従ってあおしくなってくる。「心配ないて」と部長がゆう通り、観音峠トンネルを抜けると晴れているではないか！　思わず顔がほころぶ。車２台に分乗し７時すぎに壬生を出発する。西京極体育館前で三橋さんの車と合流、一路９号線を北へと向う。車中で前回の（法沢山）の話など聞きながら、途中２７号線との分岐にあるドライブインでトイレ休憩する。福知山市を１０km程行き、野花という所の三叉路を９号線とバイパイして右に４２６号線に入る。登尾峠を越え、但東町出合を左に行くと、出石、豊岡をへて城崎へと至るのだが我々は右折して県道に入り唐川、そして木村の集落を少し過ぎたあたりで左折し、高竜寺への道を左に見ながら坂野の集落に入る。二車線のきれいなアスファルトの道路を少し行くと、地道になりおのずから林道へとみちびいてくれる。この辺りから今朝早立の先発隊と交信する。先発隊はいつもスリムでタフな大槻さんと、若さと馬力を感じさせる古市さんとの二名である。彼等は朝５時に京都をでて法沢山に登り、尚もここで我々と合流して再び高竜寺山へ登ろうというのである。スゴイデスネー…我々が新林道と旧道の分岐点で待機していると、先発隊の声が無線機から聞えてきた。１５分程で我々と合流、無線の威力を発揮する。旧林道を終点まで入り丁度都合よく広くなった場所で駐車、前方に堰堤が見える。各自身仕度よろしくいよいよ出発である。先程の新道が完成したためか、立派な道標があるのに取り付き点が不明瞭である。山道に入ってからも最近人が歩いた様な跡もなく、草はぼうぼうで足元もよくない。誰かが「廃道になるのは時間の問題やな。」と云った。淋しい気がした。尾根にでると、辺りが急に明るくなり植林地帯が広がる。津田さんに聞くと、以前はこの辺りもぶななどの木が沢山あっていい道だったそうである。見上げると、左手前方から新しい林道が我々の行くてまで延びている様である。峠に人影が見える、里の人達であろうか。思った通り新しい林道へと出た。さっき見えた人達はやはり地元のおばさん達で山蕗を採っておられた。この辺りは山菜の宝庫らしく、今登ってきた道にも蕨やとうのたったぜんまいだのが密集していた。町の人達もさすがにこんな山奥までは来ないのであろうか。林道から今登ってきた道をもう一度目で辿る。ここからは旧道へはまず入れないだろう。それほど分りにくいのである。この場所は峠（鹿ケ畑峠）になっていて、路傍には高下駄を履いた身の丈４０cmくらいの石の役の行者様が我々を出迎えてくれた。立派な道標には、高竜寺山ともう一方には鹿ケ畑としてある。峠から北側を覗くと下に集落が見える。あれが鹿ケ畑であろうか。久美浜湾もそう遠くはないはずである。昔はよく魚などをかついで丹後側から峠を越えてこちらの村へ売りにこられたとおばさん達が話してくれた。話を聞いてなんとなくなつかしく、今はもう誰も通っては来ない峠の向う側をもう一度のぞいて見た。峠と林道の交叉するすぐ上の尾根に、高竜寺山への道がある様だが、我々はそれをゆかず林道を行く事にする。

約5分程下った分岐点を右に登っていく林道があり終点までゆるい坂道を登る。前方に見上げるように高竜寺山。最後の登りにファイトが湧く。林道終点から高竜寺山への登り道は見当らない。が、そこは山岳部そんな事はおかまいなしに尾根に取付き直登といった感じになる。まだ1mにもみたない杉の植林地帯なので見通しがきゝ安心できる。一息入れると、「最後の登りです。お腹のすいている人はおにぎりを一つ食べて下さい。」例によりリーダーから指示が出る。急勾配の山腹での小休止である。下の谷から風が吹き上がってじっとしていると肌寒い、ガスも少し出てきた様だ。それぞれに胃袋に詰めこみ元気が出たところで歩きだす。一気に稜線まで登るとしっかりした道がついていて、麓へと続いている踏跡のガスの向うにうっすらと集落が見える。雑木林を50mほどぬけると、目前に朽ちかけて今にも倒れそうな測量の櫓が現われた。その下には三角点も見える。頂上だ！　そしてどういうわけか急にお天気が良くなり青空が見えてきた。ラッキーである。岡田部長の音頭で万歳三唱、うれしい瞬間である。これからビールが飲めると思うとよけいにうれしい。実感ズッキーンである。気持のいい頂上で太陽が一ぱい。オゾンも、お腹も一ぱいで云うことなし。頂上から特に北側の展望は素晴らしく久美浜湾から日本海が遠望できる。壊れかけた測量櫓の上にのぼると、西左手遠方に法沢山が見えると教えてもらった。一度に何人もが上がると危いのでかわるがわる上ってみる。なるほど尖った山が見えた。十分な休憩をとり、頂上とお別れして下山する。東にしっかりした道があり、雑木の中をいきなり急降下する。雑木林を抜けると、今度は南側の展望が良く大江山や赤石岳、三岳山、そして次回登山予定の江笠山が「早くおいで」と手招きしている。ずーと右に目を転じると、朝登ってきた林道終点からの道なき尾根筋がよく見えていかに急勾配だったかがわかる。下るにしたがって山道と林道とが平行する様になるが、それも少し行くと切れてしまってやがて林道に降りる。此の地点が高竜山への取付き点なのだが、林道からくると注意していてもやり過ごしてしまうだろう。そこで、ここが入口だと分る様にしようと土手の土をけずって足場を作り、付近にあった丸太を並べて道しるべ、木立にはビニールテープをまいて目印をつける。完璧である。共同作業なので十二、三分程で出来上がる。往きに通った林道を引きかえしているのだが、5分ほど行った所で大槻さんが旧道を見つけたらしく、小高い山の方へ登っていく。後に、数人が続く。だれかが「この道も廃道になるぞ。」という声に林道を歩いていたのだが、引き返して村さんと二人で、のこのこ後から仲間に入り、林道組と別れる。少しの距離だったが行者様のある峠へはタッチの差で旧道側に軍配が上がる。行者様をバックに写真を撮る。峠をあとにし朝登ってきた道を駐車場まで一気に下り、谷川の水で顔を洗いさっぱりして帰りのコースを確認する。時間があれば登尾峠のピークへ行く予定だったが、道のりが大分ありそうなので断念する。その代り次回に行く江笠山の偵察に薬王寺峠へと向う。道路もいいし天気もいいので絶好の山岳ドライブである。薬王寺峠は標高510m新品のアスファルト道路の美しい峠である。峠の広場に車を止め峠をはさんで景観を楽しむ。今日我々が登った高竜寺山の雄姿と磯砂山、峠を少し戻ったところからだと法沢山もよく見える。江笠山はこの峠の北東にあるらしいのだが、手前に尾根があってよくわからない。大江山が東に大きく見える。薬王寺峠を薬王寺の三叉路まで下り、左折。小さな峠を越す（この峠を北上すると江笠山がある。）176号線に出ると雲原（次回通る所）そこを右折

して下天津の175号線に出る。部長が此の辺りの地理に大変詳しいので驚く。下天津を右折すると福知山市へ至るのだが我々はそれを行かずに左折する。この辺りまでくると、助手席にいる私はちんぷんかんぷん一体どこをどお走っているのか分らなくなってしまった。2Km程走り公庄という所を右折、由良川の橋を渡り在田の集落から間道を抜け綾部へ、綾部の町中をちょこちょこと通り抜け国道173号線に出る。瑞穂トンネルをくぐりぬけ、質志鐘乳洞を左に見ながら瑞穂町9号線との合流点にでた。後は9号線を南下するのみである。丹波町にあるドライブインで30分ほど休憩して帰路につく。今日は登山もできたしいろんなところをドライブ出来て楽しかった。ありがとうございました。

〔コースタイム〕

みぶ7:10 ー福知山9:05 ー車止10:26…鬼ケ畑峠10:53～11:00…2等△高竜寺山11:55～13:09…14:10車止ー薬王寺峠14:55～15:20ー綾部16:00ーみぶ18:36

〔参加者〕　山村、横井、村、三橋、和田、楠、方山、出海、古市、大槻、津田、岡田

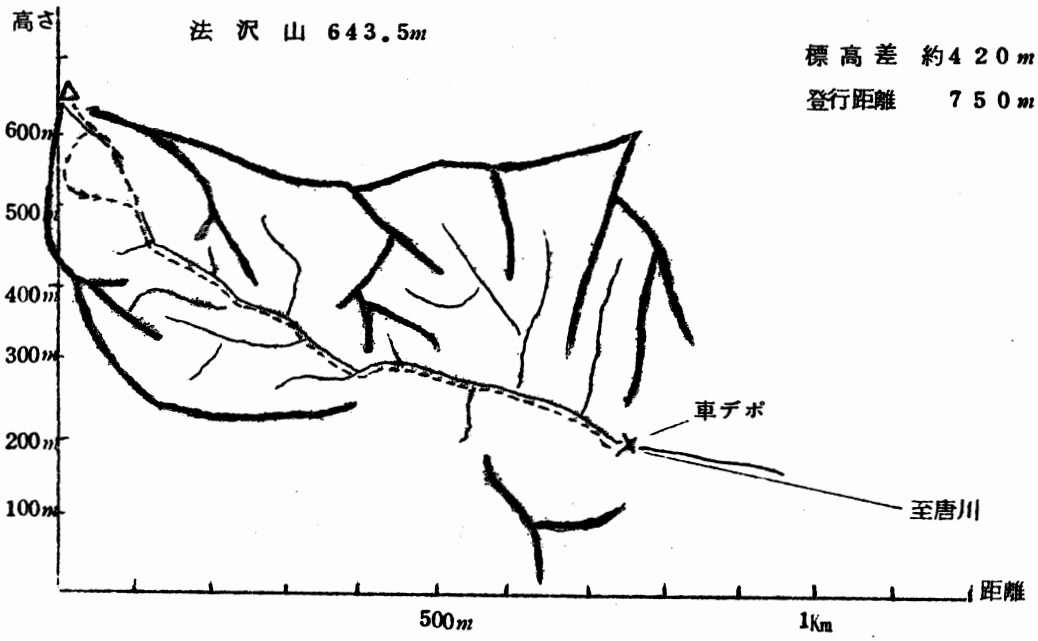
（車　3台）

新緑の法沢山（643.5m）

古市昌造

「府県境の山シリーズ」第1回法沢山に参加出来ず残念に思っていた所、大槻副部長より大変嬉しい誘いがあり、番2回高竜寺ケ岳例会の5月26日に2山を登頂例会参加も出来るよう早朝5時出発で、出石町、唐川、法沢山南東の谷を目指し「世界のホンダ」でR9・R426号出合より唐川へ林道を左へ川添いに約2Km入り標高約220m附近で7時20分着車をデポした。早々に朝食・身支度をし、7時47分出発。前日の天気予報では午後より晴とのことであったが、ガスと小雨まじりとで前日の雨が新緑の木々の葉に残り、又、沢詰めのため全身びしょ濡れ「美貌と若さ」？を自認する2人も形無し。植林された杉林を沢添いに歩を進め、沢・尾根を数え、ガスに包まれた谷合を地図に印をつけながらの登行。昨年10月28日、第1回京都府踏査競技会にオープン参加し地図の読み方の難かしさを実感として受けとめて以後出来るだけ山行には地図と磁石を持ち読図を心掛けているのだが、なかなか難かしい。4～5の沢を数え後は山感で藪漕ぎの急登に、鹿か猪の足跡を見つけ獣物なみにはい上る。頂上より南約50の尾根に飛び出し三角点に到達す。ガスのため視界0、無線機にて第2回高竜寺ケ岳隊を呼び出すが応答無し。ウグイスだけが囀り、天気さえ良ければ雨露で濡れた衣服を絞り、朝寝が出来そうな充実した気分にひたる。記念写真もそこそこに帰りは登りの尾根を鞍部まで戻り沢下りをし元来た所へと出る。この頃よりガスも切れ晴れだし登りの時の読図と山感の正確さに気分良く自信を深め、車止へと急ぎ9時56分車止へ着いた。直ぐ高竜寺ケ岳隊と合流の為車を走らせ、車中より無線交信、近くの坂野で停車中との事少し待っても

らい合流す感激の出合？　当日の山行者にしか「ワカラナイスタイル」良かった!!



〔コースタイム〕

京都発 5:00 ―車止 7:20…登行開始 7:47…△ 8:57…下山 9:10…車止 9:56

〔参加者〕　大槻雅弘、古市昌造

第１５３９回例会

六甲　天狗岩南尾根から寒天山道へ

鷲　見　敏　一

１５３９回例会六甲の谷「西山谷」であったが大規模な堰堤工事のため現在入谷が禁止になっている「５９年１０月～６０年８月」まで。

阪急御影駅から市バスで鴨子ヶ原団地まで行き、渦森団地を通り渦森橋の手前を寒天橋まで歩く。寒天橋には登山者の西谷溯行禁止の看板があり、ガックリする。大月地獄谷に変更しようと思ったが出合までもどるのも「シャク」であり、尾根歩きに変更する。千丈谷堰堤から天狗岩南尾根に取り付き尾根に出る。モミジイチゴの黄色い実が豊富に実っている尾根道を５０分程登ると天狗岩に着く。神戸の街や海が目の前に広がり景色の良い所である天狗岩で昼食にする。昼食後有馬に下り

たいと言う井戸君と「ケーブル天狗岩駅」で別れる。「有馬には日く因縁があるらしい。」小生はサンライズ、ドライブウエイを天狗橋から寒天山道下り口へ着き、寒天山道を４０分程下り寒天橋へ着く。途中尾根から見た谷の工事現場は映画のセットのように見えた。寒天橋から西谷橋まで歩き市バスで西谷川ぞいを白鶴美術館まで乗車し、そこから徒歩で阪急御影駅まで約２０分阪急にて帰京。今日の山行は急遽コースを変更したのでなんとはなしにスッキリしなかったが、それなりに楽しい山行であった。

〔参加者〕　井戸澄夫、鷲見F　　計　3名

〔コースタイム〕　6月2日（日）　晴

8:05 阪急四条河原町ー十三ー西宮北口ー御影駅ー 9:55 寒天橋… 10:20 千丈谷堰堤… 11:10 天狗尾根展望台… 11:25 ～ 12:10 天狗岩、昼食… 13:40 寒天橋… 13:59 渦森バス停

蓮華温泉 ～ 雪倉岳

日　時　　5／2～5／5

場　所　　白馬大池駅～蓮華温泉、　乗鞍岳～雪倉岳～平岩駅

5／2　　午後9時、ムラカミ運動具店集合、車4台で出発。中途松本ドライブイン休憩。

5／3　　晴、午前6時、白馬大池到着。　天狗原１２時到着。

乗鞍岳(△2400m)で豪快なパラレルを楽しんだ。雪がやわらかく急斜度でもふんわりと下ってこれる蓮華温泉までの前半が斜面も雪質もよく快適にスピードを楽しめるが、後半は谷筋をこまかくトラバースして行くのは苦痛以外なんでもない。昨年に比べ雪が少ないとコースがかなり荒れている。温泉に着いた時には、やれやれという感じである。

5／4　　晴、雪倉目指して板を引きずり歩くことにした。今回はザックを軽くしたせいか、コンディションがよく、なんなく頂上に到着することが出来た。下りの滑降も足ががたがたになる程長かった。たっぷり滑れたという感じで、滑ってる中途でしゃがみ込んでしまいたい程ロングコースであるが、温度が高くグサグサの雪のため、白山より滑りは悪い感じである。

5／5　　温泉から下は、雪が途切れ途切れにしかなく、かついだり滑ったりしながらのんびり春山をハイキング気分で下ることにした。途中、山菜をつんだり、イワナ釣りを楽しんだりしながら木地屋まで下った。帰りは親知らず子知らずで、たら汁食堂で風呂に入り

のんびり一時間すごし、京都着は午前3時であった。来年は3月23日春分の日に蓮華温泉には来ることにしようと思う。やはり雪がよい時期に来たいものだ。白銀がたっぷりある時の蓮華及び乗鞍はどんなだろうと今から胸をときめかせている。

〔参加者〕　三橋、大槻貞、ムラカミ運動具店の客　計15名

山癖雑記　二十六

伊藤潤治

ヘニヤボラ南峰

奥伊吹と自称する地に、ヘニヤボラと呼ばれている渓谷がある。私にはヘニヤボラと聞えるのだが、ハンニャボラと聞えるようでもある事や伊吹町図にベンニャボラの註記のある事などを考えると、ヘンニャボラが正しいかも知れない。まことに表示の厄介なこのヘニヤボラは、近江国坂田郡伊吹町曲谷の起し又川上流に秘められ、表題に掲げた南峰とは、美濃との国境稜上の・1,187m峰のことである。起し又川の渓谷は他にも、江美国境に扇状の水上をもつサナギ谷。また五色ノ滝（旧称水滝）の名瀑郡をかけたアザミ谷がある。

4月10日、8時40分　起し又川左岸の林道終点につく。まぶしい空からウグイスの美声がこぼれ、せまいながらも曲谷の水田地帯なので耕作にはげむ里人の姿があった。

この日私は右岸尾根をぬい、△1,006mを経てヘニヤボラの頭（Ca 1,210m）を登頂のつもりであったが、これは今頃からでは遅く至難だと忠告され、心ならずも親切な助言に従うことになる。しかし渓谷を足下20mほどに落葉木の明るい左岸は、踏みならされて幾星霜だろうか、里人ならずとも推奨したい道と風景の展開だった。

小ソブ谷をすぎ深々と茂る人工林、心血がそそがれた田甫あとを見て通る。対岸には予定コースであった植樹後間のない・542m峰が陽光を浴びていた。滝があって渓谷に入ると道が消えた。右岸の伐採地に上ると左岸上に道が見え、うっかりこの道に誘われてしまい気がつくと南進している。

コンパス、マップ、バロメーターをにらみ合せて予定コースから外れていると知りつつも、そのまま更にあまりにも胸のすく南への踏跡を、何の戸惑いもいささかの懸念もなくひたすらにたどりうわの空の状態で足俣谷を分け雪を残している境界稜へ吸い寄せられたのだった。

そこには、イブシ銀の伊吹。間近い虎子もほとんど白く、少し離れるが金糞のピカピカ等〝流石に〟の目醒める展望があった。だからきようは、サナギ谷の水上すべてを巡るすばらしいコースになったのである。残雪量が予想より少なく、いささか時間を喰ったが、それだけあこがれの江美国境を入念に歩けたのだからありがたかった。

かくてめでたく登頂できたのであったが、尾根頭の露岩に下ると、そこに△1,006mの尾根があり登頂したのはヘニヤボラ南峰であった。

きようは、たとえ間違いにしても乾杯をあげてきた頂上である。私にはこの頂上での歓喜と慶祝

を取消す気にはなれなかった。ヘニヤボラの頭にはあらためて表敬登山のつもり、その折はもう少し残雪のある頃でフンゲンΔ1,259.7mにも再訪。そんな夢を描きながら下山。この日はよほど多情であったらしく(が災いして)、そこに駐車点というところにきていながらイモチ谷、寺谷、姉川と迂回して実働10時間。思い出は痛快であるが、何と奔放な一日であったことか。

木地屋小屋ノ高

小滝(丹生図、伊勢10号)に行き、加納酒店でΔ977.7mの山名を尋ねた。すると逆の方向を指して、三角点山との返事だから、いやそちらでなくて始神谷の奥にあるΔの山名ですが、と問い返えせば、その山なら野呂清三さんをたづねて聞くように教えてもらった。

ちなみに三角点山とは、島谷の奥との事であったからまぎれものう中又Δ982mであり、三角点山の呼称は、中又が一等三角点の山であるためであろう。三角点山の即答は、近頃一等三角点が脚光を浴びているようだから、ここえよく訪れてくる登山者があるのかも知れない。

始神(はじかみ)谷、右岸の野呂清三さんをうかがうと折よく在宅され、Δ977.7mは木地屋の小屋があったので木地屋小屋ノ高といいならされている。とのこと。登山道は始神谷よりも栗谷にある諸戸林業の林道を利用した方が距離が短かく時間もかからなくてよい、とすすめられたのだが、私は始神谷コースに固執したので野呂さんは、二千分ノ一の山林図を拡げていちいち説明の上概念図を書いて下さった。

林道終点の木影で昼食のあと概念図に従い左岸へ渡り、岩と流水による渓谷美を足下にみていくと、左から本流が落ちこみ道は支流の左岸になったが、少し上流ですぐ本流の左岸へつづき雨覆いがあり焚火をした山林作業の食堂趾につく。

ここでヤマノカミ谷とイワガミ谷の道が分岐する。勿論、図示の右をとる。よく踏んであったが露岩の点在が多いなかなか急な上りである。緑陰つづきだから涼しそうなものだが、やはり暑かった。のぼりが緩やかになって着いた平地はT字路で、左は岩間に清流を落とす谷をまたぎ樹林へ急登。右が野呂さん図示の低木帯のトラバース道で、風そよぎ明るい南方の展望があって、人工美林帯に入れば斜面の急登で尾根に上ると、右に伐採地がでてきてアンテナの建つ飯高町界の峰。

ここから先は可愛いい笹原、晴れやかな疎林。何とも快よき夢見るような自然界になる。木地屋小屋ノ高Ⅲ Δ977.7mは、その様なすばらしい環境に守られてあった。展望は木の間越しの局ケ岳に見ほれるくらいだったが、尾根筋の情景はたまらなくよくて、名倉谷へ下りかけたほどである。これで往路を戻れば藪山にならぬと思い、町界を下り谷までは何とか評価できそうだったが、谷を左へとると往路のT字路に出てしまい、藪山だったと威張れなくなってしまった。(T字路の正面の枝葉をひろげている植樹間には、かぼそい踏跡が見えた。やる気なら直登できるだろう。)
付近には絵馬小屋谷や池ノ木屋山というコヤ地名があり、木地屋姓の小椋の有無などいろいろ興味深い事が多く、また訪れたい山里や山地である。

敦賀山の会と林さんと

敦賀山の会とは、栄螺ケ岳△686mと西方ケ岳△764m（今庄）をお世話になった1959年2月4日以来、親しくしていただいている。

この敦賀の地は北陸路であり、やはり雪国である。従って敦賀の人達の雪との交際は父祖伝来、つまり生れながらのものだから当然お上手にきまっているのだが、積雪期の越美国境稜縦走を1957年に着手しておられるのは生来、豪雨に親しんでいるつわもの揃いの敦賀山の会ならではの芸当であろう。こうした猛者たちの山の会の長は、敦賀半島の山を開拓なさった林清一氏（以下林さんと呼ぶ）であるが、先年のこと、この雪国から伊勢国にご移住になったのである。事情は承ったものの敦賀の主、林さんが余生に至って最愛の故郷の山と人をよく捨てられたものだと、その果断ぶりには驚いてしまった。

林さんの移り住われている伊勢は、私の生国でありなつかしい。加えて林さんも私も1913年誕生の同干支、それが今年はたまたま私たちの干支丑歳と揃ったのをめでたがり、林さんと伊勢の国見山△1283m（大台ケ原山）を敦賀山の会の人達と登るうれしい話がまとまった。

だがコースの大和谷が工事中で立入れないと分り、魚住ノ高△1291mに変更した。旅館もはじめ大杉にとったが多数だといって転々させられ、登山には遠い江馬の「ゆたか屋（丹生）がうけてくれた。申し分なき旅館で車行族にはかえってこの方がよかったかも知れない。

木地屋小屋ノ高を下山してゆたか屋につくと、林さんは既に先着してお出であったが、敦賀勢は少しおそかった。林さんとは牛草山△550m、タカトネ△784m（伊勢）以来だろうか、相変わらずのうれしいお元気。寺沢護さんとは、キラ（雲谷）山△787m（西津）。ホノケ山△737m（今庄）がある。

寺沢さんがいいものを見せましようと、アルバムを開いてくれる。そこにはかっての栄螺、西方でのにこにこ顔が一パイである。私の46才の顔も宮後君の紅顔も、また敦賀山の会の15名さんの美顔、和顔もならんでいる。だが、立石昭さんや東野さん、松田さんは既に故人と聞いて驚いた。なかでも立石さんは、わが宮後君のようにあまねき愛情と豊かではげしい情熱の持主であったことが、その生涯を若くしてみづから燃えつきて閉じねばならぬという、いたましい結果であったようだ。知らぬ間に頼りになる山男を失っていたのである。私は、不思議に命長らえての感慨と生者必滅の哀愁が音をなして、どっと吹き抜けていくのを感じた。

敦賀は寺沢さんと初対面のシンさんこと五十嵐進さんと、宮本学・喜恵さん夫妻と、宮内なをいさんの好メンバー。京都は私と坂井久光君。この顔ぶれが伊勢の林さんを囲んで小宴に入った。会長さん、会長さんと呼ぶうるわしい慕情。あつい感動に包まれた座は、寺沢さん、シンさん、宮本夫人、宮内さんに坂井君も加わって大盛会になり、まさに喜び満ち春宵価万金の集いであった。

しかし私の都合でこの計画が一週間繰下り、井上泰利さんを不参にさせ、林さんにも先約があって翌日の山行を断念してもらわねばならなかったことは、申し訳なかった。この償いの好機が速やかに到着してくれると、うれしいのだが。

この度、また林さんも私も車好きと腰痛の持病までご同様と分った。どうしてこうなんだか、まったくおかしな事ではないか。

ウグイの高

親しくしている或る会の例会にこの名があったので、これはと心惹かれた。それを知って宮崎日出一兄は、すぐこの山の資料を下さっている。ところがこの大杉谷地区には1955年に松阪山岳会の父ケ谷溯行で一度きている事に気がついた。その当時の大台ケ原山（昭和29年8月30日発行）図を出してみると、すっかり忘れていたが父ケ谷へ落ちる谷名とともに△1，291．7mにはちゃんとウグイの高が記入してあった。

これはその折、何かとお世話になって泊めてもらった、まことにまことになつかしい大杉谷小学校での収録である。一緒に保存してある尾鷲営林署の昭和32年編図も「魚ノ高」を採用しているので私は感動してこれを表記する事にした。

ウグイの高の標高は、昭和45年発行図の△1，291．3mが正しい。前述の昭和29年発行図及び伊勢20万（昭和34年発行）図の△1，292mはともに誤価である。

ちなみに点ノ記より参考として△の所在「伊勢国多紀郡大杉谷村大字大杉字魚谷」と、△への順路「大杉谷村字檜原ヨリ約七里魚谷に至りソレヨリ桜尾ヲ経ルコト約三里頂ニ達セバ右折シテ行クコト二里本点ニ達ス急ナリ案内者ヲ要ス」以上を抜粋しておく。

宮川貯水池畔は、国見山とウグイの高を背に静かな水をたたえ、美しい行楽地の風景をしていた。ウグイの高がとりわけ巨体に見え感激する。その宮川貯水池のおおらかさは、新大杉橋を渡るときえて父ケ谷林道へ入ると岩石群が荒々しい顔で随分ならんでいた。父ケ谷から南谷へ移った林道ですぐ営林署の家屋があった。林道は奥へまだ続いていたが、ここで車をとめた。

理由はこれほど安全な駐車場はあるまいと思ったこと。と、出来ることなら破線路をルートにすることで重い靴の林道歩きを逃れたい。こんな願望もあったのである。林道をゆっくり登って5分未満で破線路の谷につく。渓谷は紅寿谷だろうか、紅寿橋が架っていた。

この右岸には小祠があり男のモノの作品を供物にしているとともに小祠を経て辿る踏跡もあってどうやらご希望どおりのようであった。しばらく進むと滝にはばまれて谷を背にのぼりフェンスに囲まれた伐採斜面へ入る。少し上ると左からの小道に合流して尾根状にかわった。小道は右斜面へ廻りこみ、やがて崩壊のため路面を欠いていた。強行できる程の悪場ではなかったが、相次いで抜け落ちが存在するかもと、尾根に上った。しかしどうも小道は破線路であるように思われ、これは早計であったかも知れない。

そこで見た緑は美しく輝やきウグイの高まで緑一色のまぶしい一望であり、谷を隔てて並ぶ頂上からの尾根筋は恍惚とする起伏を連らね、せめて下山にはと招いているような情景だった。けれどなんぼきれいな緑が一パイだというても皆伐によってあからさま過ぎる緑はまさに玉にキズ、迫力を欠いている。

伐採上限線に再びフェンスがあって、伐採をまぬかれた樹間に入ると、稜線には御料林の昔から踏んであるような道があり奥山のすがすがしい芳香がただよっていた。その内に左が開けて父ケ谷に向って流れている地表の、あらかたの乱伐を見ながらのぼることになる。乱伐の烙印を押したが鮮緑に彩られたのびやかな光景は、放牧地を連想させていた。

道は高木の樹下を行く深山の情緒を供えたものだった。この稜線にそって自然林をとどめていることは何かいわくがあっての事であろう。御料林界であったことのための保存か、或は防風林として役立てるべく伐らなかったか、それとも、尾根筋は神々の往来される通路であるとの畏敬から斧を入れないでいるのか、もう一つは、杣人たちの山への儀礼であるのかも。何れであっても、こころよい思いを誘う木立たちである。

父ケ谷最後の支稜が合体すると、ササの波が迫ってきてようやく藪山らしくなった。だが頂上は既に間近であって、ちょっとササを分けただけで何だか夢のような登頂だった。そこはかとなく長居をし、往路を道草を喰い喰い下山した。

このウグイの高は、相当な苦行を強いられそうに考えていたが、私には温厚で品の佳いたのしい山であった。

牛場の山

親友の還暦祝いを本人の希望で上野図の△647.2mで行った。その所在は、京都府相楽郡南山城村と滋賀県甲賀郡信楽町にまたがっている。これを、ある人は京門山。ある人は京山。ある人は牛塚山と、それぞれ異った称をお用いである。これ位いの標高でも人里近いのと、やはり多面体であるからには接する面々によって呼称の分れてくるのは当然であろうし、大袈裟に申せば国境線上である。山名の違いがあってもあながち不思議とするには当らないのではないか、従って何れも正しい山名であると信じたいと思っていた。

はじめ無縁だと決めていたこの山に登る事になっては、登山者たるもの好むと好まざるを問わずこの多情的な山を考えてみなければならなくなって、京門から受ける印象はどうも京都の出入口、だが実際的ではない。が、牛塚は牛の冥福を祈った牛の墓であって童仙房開拓に従事した牛どもを想像する時追善供養が営まれお経、つまり経文をとなえたり、経文をあげる山。こういう牽強は会や語呂合せをやってみたり、あるいは現地のある所では京門山、ある所では京山、ある所では牛塚山ともらう返事が入り乱れて閉口する場合を連想したりしていた。

とにかく正しい山名への義務と使命感にもえてでかける。近江での収録は多羅尾字西出の西尾さん方で、あの辺りは牛場の山でしようと答えて下さった。

童仙房九番の牛場は、大久保二軒、石川一軒、西野一軒の四戸の里で、西野さんによると牛塚とは野殿の近くときいている、とおっしゃっていた。ちなみに牛塚とは△647.2mの点名である。△647.2mは牛場地籍だが山名はご存知でなく、大久保本家の隠居にとの事だったが、相憎その人は不在。それにしてもその後、四番、南山城村役場と馳け巡ってきたのに、京門山、京山、牛塚山を知る人に出会えなかった、これは一体どういう事なんだろう。

△647.2mは牛場越え（童仙房では多羅尾境ータローザカイときこえてくる）から20分もあれば登頂できるが、登山口の表示はなく茂っているため歩き辛く、おまけに辺鄙で特徴のあげにくい、これは玄人筋が好んで歩かれる静かな山の感じである。

何かを聞いて何かをはっきり捉えて帰えろうと胸はずませたのだったが、近江で聞いた「牛場の

山」というのが私の心にひびいただけであった。この山名、流石にかかわっている干支が干支だからなのか、おいそれと一筋縄では参らなかった。どうもおかしいかぎりである。

東山三十六峰を歩く会

田　中　定　勝

主 催　ネーチュアークラブ

日 時　4月21日　晴　午前9時

集合場所　東山七条　豊国廟入口

講 師　逢 原 一 生

第三回（最終回）

コース　阿弥陀ケ峰…今熊野山…泉山…恵日山…光明峰…稲荷山

午前9時10分出発前に講師の紹介と今日登る山を話された東山七条の妙法院と智積院との間、京都女子学園の通学路でもある広い道に立つと阿弥陀ケ峰は真東に姿をみせる参道を東へ進むにつれて両側には桜が満開でとても美しい。

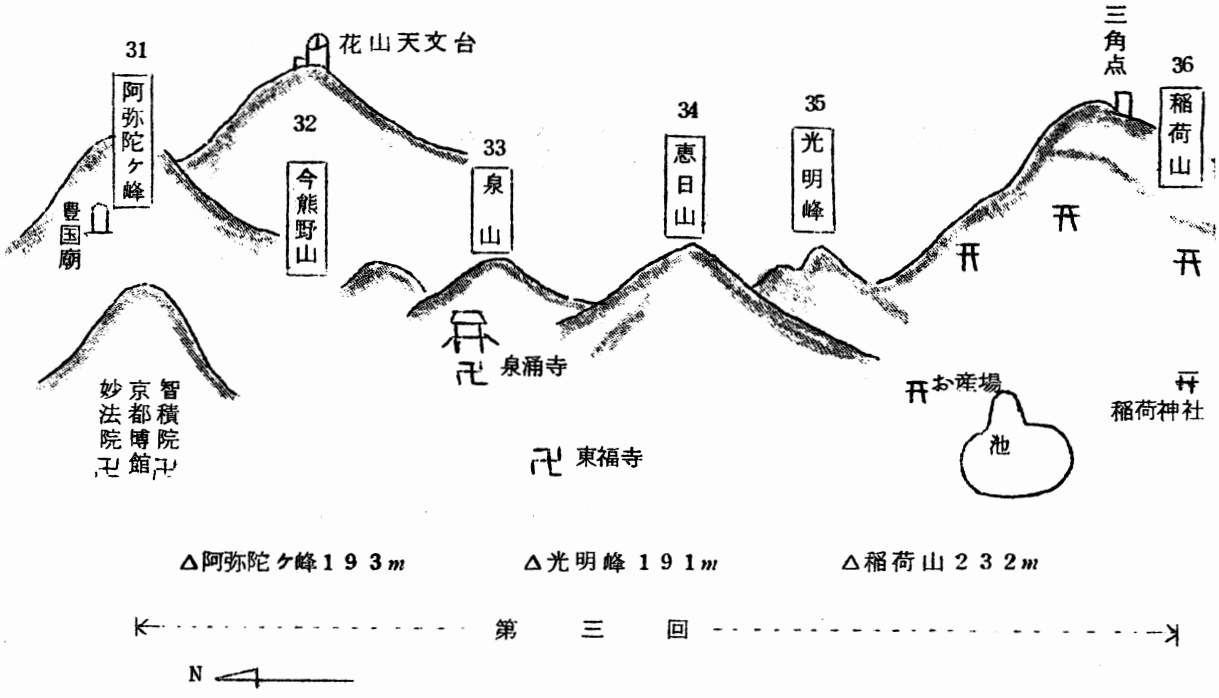
こゝから秀吉を祀った豊国廟のある阿弥陀ケ峰の頂上へは、まっすぐの一本道である。565段という急な石段を登りきると標高193mの頂上である。豊国廟は石のさくに囲まれた高さ10mほどの五輪塔を中央に香炉、花びん、石灯ろうと何もかも秀吉好みのデッカイサで、これは秀吉三百年忌の明治三十一年に再建されたものである。

阿弥陀ケ峰は三十六峰の一に数えられるものであり、北は小松谷を距て清水音羽山に、南は滑石を経て泉山に、東は山科に接する。この優麗な山容はかの清少納言をして「峰は、ゆづるはの峰、弥高の峰」と嘆ぜしめたこの山は古くは鳥部山と称し、その麓を鳥部野とよばれた。

しかるに聖武天皇の天平五年（七三三）僧行基がこの山に阿弥陀如来像を安置してより、かく呼ばれるようになった。南下すると今熊野山ー滑石街道を南に横切り泉山に入る。こゝで小休憩する前方東には山科盆地、北の方は花山天文台、西の方は市内が一目でわかる。

泉山御陵の東の裏の峰は、鉄条網が張りめぐられていた。暫く行くと稲荷山の東方の処へ出た。こんもり茂ったうす暗い処が三角点であった。「一の峰、上之社」全員こゝで最後の説明と挨拶があり、全員また次回に合いましようと、言葉を交わして解散した。

参加　60名



当麻寺　二上山

5月5日　晴（祭）

寺田駅午前8時25分乗車、新田辺でのりかえ橿原行急行に乗る車内は満員であった。橿原一当麻寺に下車して参道を西に向う。お詣りをして朱印を頂き境内のボタンを見て中将姫ゆかりの寺石光寺にも詣り、二上山へ途中に傘堂があり左甚五郎の作と伝えられる一本柱の珍しい建物を見て、付近には石仏三体と東向不動明王通り抜けて聖徳太子が拓いたという岩屋峠を越え、雌岳展望台から雄岳へこゝで昼食とす。1時に出発する。

二上谷を下り途中金剛砂の採掘跡を経てドンヅルボー（屯鶴峰）へ、常々見る山と一風変った景観に異様さを覚えた白岩道には赤ペンキで矢印があり、道には迷わずに太子温泉前に下山して国道165号線を約30分程歩いて二上山駅に着く。

当麻寺　用明天皇の皇子麻呂子王が河内国交野で仏寺を営んだのが創めで、その後当麻国見が

役行者練行の地であった現地に遷した。天武天皇9年に起工したという。
境内は現存唯一の例として有名な東西2基の塔や金堂、講堂が南面して南北に立つが本堂、塔頭13ケ寺が東西に並ぶ稀有な伽藍配置をしている。牡丹の名所。

二上山　大和と大阪（河内）の国境にあり、山頂が二つに分かれ北側に雄岳（515m）と南側に雌岳（474m）があるところから古来〝ふたかみやま〟とも呼ばれる。この山に沈む落陽の詩情から神聖視され、殊に大和の人に親しまれてきた。
二上山（ふたかみやま）というのであるが、土地の人たちはいつの間にか二上山（にじょうざん）と呼ぶようになった。二上山は男岳頂上に大津皇子が葬られている。このかたは天武天皇で万葉集や懐風藻にすぐれた詩歌をのこしておられるが、持統天皇のおり、謀反の光あらわれて死を賜わった。

屯鶴峰　二上山の北麓、二上山旧火山の凝灰岩が露出したもので松林の間を白色に点在し、鶴がたむろするように見えるところから、ドンツルボウと名づけられた。
高さ70m内外の連峰で南北1,000mにわたり、天然記念物。

コース　寺田…新田辺…櫃原…当麻寺…石光寺…傘堂…岩屋峠…雌岳…展望台…雄岳…採掘跡…屯鶴峰…太子温泉前…二上山駅（近鉄南大阪線）

歩こう会

神野山一鍋倉渓

5月19日　晴一時しぐれ　（日）
集合場所　　烏丸御池南東角
バス　　奈良交通観光　大型

午前8時出発、今日は久し振りで車でのドライブ歩こう会で、皆衆は子供にかえってワイワイと車中は大賑やかであった。神野山口で下車して、バスはかなり上まで登っていたそうです。あと400m大きな案内板に従って集落を抜けて山道に入るゆるやかな登山道で、約1時間程度で山頂に着いた。標高「619m」頂上は広い台地で、つゝじの名所有名でちょっと遅かったので吹いた後であった。一等三角点無線中継所、古墳もあり又素晴しい展望も楽しかった頂上から少し下ると「いこい森」広場があり、此処で昼食となる。

時間がたっぷりあったので、ワラビ、ゼンマイ、ヨモギを採って今日の収穫であった。再び山頂へ引返し鍋倉渓を目指して歩く。幅20cmの渓巾一ぱいに埋める黒い岩石は異様な感じであった。鍋倉橋に出て右に折れて車道を山添村グランド前駐車場よりバスに乗車して帰途につく。途中で、24号線城陽消防署前で降りる。

神野山　大和高原の中で一番形のよい山、それは神野山である。ほぼ円錐形、高さ619m「生

駒山は642m」、頂上からは鈴鹿、笠置、生駒、宇陀の諸連峰が見える。上野城、月ケ瀬、高山ダムは呼べば応える処にある。

鍋倉渓 神野山の東北傾斜面にそって麓に向って幾十万真黒な巨岩怪石がるいるいとして連なり、幅20m、長さ650mに及ぶ岩の上を危く渡って下ると、岩間底深く伏流水の音が聞えるが水は見えない。昔から「なべくらの水には亡き親の顔が映る」といわれている。この偉大な奇景はどうして出来たのだろう。

伊賀の天狗とこの山の天狗がけんかをして石を投げあったという伝説は別として、よく火山の噴火説を考えるが、そうではない。

この道の学者は「大和高原は花崗岩の深成岩類であるが、この山だけは「生駒山も」角閃斑栃岩という実に堅い岩石からできている。永い年月の間に雨水で表土が流されて岩石が現れる。表土のやわらかい処が益々低くなり、遂に谷が出来る。斑栃岩は風化浸蝕によく耐えて処々に残り、これがやがて谷へ転げ落ちた。この転石群が今日をあらしめた」といわれている。今でも大雨のあった後各処に小石の転石群が出来て、なべくら渓型が出現している。　　参加　55名

コース　烏丸御池ー24号線ー奈良ー名阪国道ー神野山口…神野山頂…いこいの森…神野山頂…鍋倉渓…鍋倉橋…山添村グランド

例　会　報　告

例会No.	目的地	月日	天候	担当者	参加者	記事
1536	物見石山	5月12日～13日	晴	吉田　武	奥村、津田台川、大倉	今年の年号と同じ高さの山に登ってきた。　別稿報告
1537	猿ケ馬場山	5月18日～19日	晴後曇	三橋　勉	伊藤、坂井田中、上島大槻貞、岡田他ゲスト　参加　宮崎	前夜発の伊藤、坂井、宮崎組午前発の田中、上島組午後発の岡田、大槻、三橋組が天生峠に集結。谷コースと尾根コースに別れて登る事になったが、途中でうまくドッキングした。　別稿報告
1538	高竜寺山	5月26日	曇後晴	津田　実岡田　茂久	山村、横井村、三橋和田、楠	大槻、古市組が先発し、前回の法沢山を登ってきて後発組と合流し、全員12名が尉ケ畑峠に

					方山、出海 古市、大槻	到着すると、前回５４年に途中までしかなかった林道が峠をこえていた。　別稿報告
1539	西山谷	6月　9日	曇	鷲見　敏一	井戸　澄夫 鷲見夫人	西山谷コース 工事中のため、コースを変更した。　別稿報告

雑　　報

6月集会報告

１０日　ＰＭ．６時　岳連ルーム

出席者　本局　鷲見、大槻、大木、和田、方山、原田、楠、三橋
高速　岡田　梅津　吉田　九条　古市　鳥丸　大倉

◎アンザイレンの意義とザイルの結び方　（大倉担当）

８の字、ブーリン、エバンス、ブルージック、グローブヒッチ等の結び方をそれぞれ練習する。

１５３６回例会	１９８５ｍの山	（吉　田）
１５３７回　〃	猿ケ馬場山	（岡　田）
１５３８回　〃	高竜寺山	（岡　田）
	法沢山	（大　槻）
６月２日	森林浴の報告	（岡　田）
１５３９回例会	西山谷	（鷲　見）

◎お知らせ　救急法について　７月１４日　中小企業会館にて（午前１０時）¥５００．
申込み　設計課　鷲見まで、（ＴＥＬ　８５４）
主　催　京都府山岳連盟遭難対策委員会

8月行事予定

９日～１１日	第１５４８回例会　夏山登山大会→八ケ岳	（詳細次のページ）
１４日（水）	８月集会　（山の花について）	岳連ルーム
１７日（土）	第１５４９回例会　鎌倉谷　（谷シリーズ）	大倉担当
２４日～２５日	第１５５０回例会　大峰の谷（上多古）	鷲見担当

夏山登山大会

（八ヶ岳縦走）

八ヶ岳連峰は、赤岳を主峰とする男性的で峻険な容貌を持つ3000m級の高峰が連なる南八ヶ岳と、草原と森に囲まれた小さな湖を抱く2800m級の山がつらなり、静かな女性的なたたずまいをみせる北八ヶ岳に分けられます。
今回新しく企画した部夏山登山大会は第一回にふさわしくこの南・北八ヶ岳の中心部を一挙に縦走する贅沢なプランです。
又、新しい試みとして今回は個人担荷10Kg程度の軽装で、テントによる縦走を行います。満天の星を仰ぎながら2000mでの素晴しいキャンプ、ぜひ参加をお勧めします。

目的地　八　ケ　岳　（北八ヶ岳から南八ヶ岳へ）
月　目　8月9日（19：00壬生局前集合）～8月11日（23：00京都着予定）
参加者　山岳部員に限る。（申込先着順　20名）
交　通　マイクロバス
費　用　約¥10,000（交通・食糧・保険等雑費含む）－ 申込金　¥3,000.－
申　込　申込金添7月集会締切〔申込受付☞（鷲見）　TEL　854〕
携行品　装備・食糧・その他携行品については後日連絡
担　当　総括　岡田茂久　　CL　吉田　武　　SL　岡本義弘・大倉寛治郎

……コース……

（一日目）　壬生局前（マイクロバス19：30発）→名神東IC→中央諏訪IC→茅野→R299→麦草峠（01：30着予定）〔仮眠〕

（二日目）　麦草峠（07：00発）…1.5Km　下　040…白駒池…1Km　上　100…高見石…3Km　上り　130…中山峠（黒百合平）…1Km　上　130…天狗岳…2Km　上下　100…夏沢峠…0.8Km　下　020…オーレン小屋キャンプ場　（16：00着予定）〔テント泊まり〕

（三日目）　キャンプ場（06：00発）…0.8Km　上　030…夏沢峠…1.5Km　上　100…硫黄岳…2Km　上下　130…横岳…2Km　上下　130…赤岳…1Km　上下　130…阿弥陀岳…1Km　下　100…行者小屋…2.5Km　下　130…美濃戸（16：30マイクロバス発予定）→中央諏訪IC→壬生局前（23：00着予定）

＊ 時間があれば上諏訪温泉で入浴予定。

帆布・濾布
テント・シート
雨合羽

木村工業有限会社

京都市中京区ミブ車庫前
TEL 801—5331（代）

西大路営業所
下京区西大路七条下ル
TEL 321 — 0251

愛されるスポーツ店

京菱運動具店

本　店　下京区大宮通松原上ル
TEL（801）1331
十条店　南区竹田街道十条上ル東側
TEL（691）8041
伏見店　伏見区伯耆町西友ストアー4F
TEL（623）0824
山科店　山科区音羽野田町1番
西友ストアー山科店
TEL（592）9770内線228

一年中、山用品だけのプロショップ

営業時間
午前10時～午後1時，午後3時～午後8時
（午後1時～3時は閉店させて頂きます）
<定休日>　火・水曜日

山・アウトドア　プロショップ
ログケビン　長谷川　博
京都市中京区御幸町通
蛸薬師南入
（四条河原町・阪急河原町より徒歩約4分）
TEL 221—7569

建設省国土地理院発行地図販売特約代理店

あらゆる地図のご用命は

株式会社
小林地図専門店

〒600　京都市下京区烏丸通六条下ル
TEL 075(351)6598(代)
地下鉄：烏丸五条　6番出口南50m
市バス：烏丸六条下車

昭和60年 7 月 1 日

京都市中京区壬生坊城町48

京都市交通局内

京交山岳部

お知らせ

今度、当チロル店舗は近代ビル改築計画に伴い、一時立退きと相成りました。
改築期間中（約1年間）は、本店2階にチロルコーナーとして継続営業いたします。

チロル

移転先　本店2階
京都市中京区西ノ京円町24

ダイヤ運動用品株式会社

HORIKE KYOTO

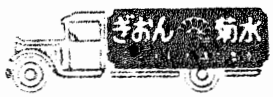
まかせて下さい…ネ
山とスキー
のことなら…

☆在庫豊富にとり揃えています
☆山の道具は　ゼヒ　御相談下さい

山とスキー専門店
ビッグ ホリイケ

河原町店　上・河原町通丸太町東入
TEL　222－0363

御婚礼
御引越



専門

ぎおん菊水運送株式会社

山科配車センター
京都市山科区西野山殆町 12－12
TEL (075)581－3101

本　社
東山区大和大路通四条下ル　541－2345

鴨川営業所
中京区室町二条上ル　256－3059

結婚引出物・内祝・開店記念品・粗品
仏事用お返し品・お中元・お歳暮用品

贈答品総合センター
厚生会指定
サンコークラフト
西島輝雄

左・川端通丸太町下る下堤町88
TEL (075) 771－3442

山とスキーの店
京都 あるむ

京都市中京区新町三条上ル
075－255－0288

HIKE & CAMP

この用具の事ならコニシが一番だ！
御来店ありがとうございます

山とスキー　レジャー　スポーツ　ショップ
そして海の コニシ

中・二条通河原町西　TEL　231－1202